

ACT
NOW!



「有限会社羽後大一興業」では、建設・土木業を担うとともに、社内に「再生エネルギー事業部」を設け、ペレットや薪を使用したストーブの販売などを行ってきたが、このたび「JAPANドームハウス」の製品を活用した建築事業をスタートさせた。



(写真上)モデルルームでは、断熱性の高さを伝えるべく自社で扱うペレットストーブも導入している。
(写真下)ドームハウスの素材の特殊発泡ポリスチレン。パーツを接着剤で組み立てていく。



有限会社 羽後大一興業

代表取締役
大野 義幸 Ono Yoshiyuki

〒012-1115
羽後町足田字大谷地58-6
(ドームハウス展示場)
TEL.0183-62-5533
<https://ugodaiichi.com/>

自ら仕事をつくる 再生エネルギー事業部の挑戦

ドームハウスの可能性

7月にオープンしたばかりのドームハウスのモデルルーム。田園風景に現れる白い半球体。その個性的な佇まいに圧倒されつつ中に入ると、想像以上に開放的で、包み込まれるような形状からは癒しが感じられる。この建物は、厚さ20センチの特殊発泡ポリスチレン製。鉄骨、木造、コンクリートに次ぐ第4の建築資材として国交省にも認定されている素材だ。

この素材の一番の特長は断熱性。外気の熱を伝えるにくいいため、電気、燃料代の削減にもつながる。また、施工の際はパーツをパズルのように組み立てていくのだが、素材が軽量なため、重機を使わず容易に行うことができ、組み立ての工程はわずか1日でできてしまうという。

このドームハウス、農業用、商業用など目的に合わせた形がある。横手市ではシイタケ栽培のハウスとして使われており、その断熱性はもちろん、豪雪にも負けない強度も立証済み。全国でも住宅、宿泊施設、商業施設、災害時の仮設住宅など幅広い用途で展開されている。

建設業のイメージを変えるために

公共工事が事業の柱となることが多い建設・土木業だが、同社では現在、その割合を減らしながら新事業に着手している。そこには、代表の大野義幸氏の思いがあった。

「公共事業の発注量が減少傾向にある昨今、この地域で自分たちで仕事を作っていかなければ、という思いで取り組んでいます。人口減少も進み、パイが少なくなっていくなかで、若い人たちに興味をもってもらえるような会社になりたいと考えています」。

建設業のイメージを根本から変えようという挑戦に期待が高まる。